

モンゴル高原における青銅器時代板石墓の変遷と展開

宮本, 一夫
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

<https://doi.org/10.15017/1650929>

出版情報 : 史淵. 153, pp.31-57, 2016-03-18. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

モンゴル高原における 青銅器時代板石墓の変遷と展開

宮 本 一 夫

1. はじめに

モンゴル高原の青銅器時代墓制は、石積み構造物からなる。その一つが円形の石積みマウンドとそれを取り囲む方形ないし円形の囲い列石からなるヘレクスールである。もう一つが、地上に露出した方形の立石で取り囲まれ、その内側が石で充填された台上の石積み構造物からなる板石墓である。前者のヘレクスールは地上に石棺などが配置されて死者が西側頭位に安置され石積みマウンドが構築されるのに対し、後者の板石墓は地下に土壌が掘られ死者が東頭位に安置される。このような埋葬構造においても、両者は大きく異なった墓制を為す。ツヴィクタロフによれば、ヘレクスールはモンゴル高原の西部に、板石墓はモンゴル高原の東部に分布し、両者がモンゴル高原中央部で交錯した分布をなすという（Цыбиктаров 1998）。一方、近年の放射性炭素年代測定結果によれば、ヘレクスールの方が相対的に古く、板石墓が相対的に新しい段階のものと考えられている（宮本2007）。

これらの青銅器文化は概ね北方青銅器文化のカラスク文化からタガール文化にあたる段階に位置しており、特にタガール文化期からは北方青銅器文化内部においても地域的特性が明瞭になり地域区分化されていく段階である（宮本2000）。しかしながら、そうした青銅器の地域区分以前には墓制において同じカラスク文化様式圏と考えられるユーラシア東部にあっては、その墓制が既に地域的な特性を持っている（Legrand 2006）。タガール文化段階での地域性は既に墓制においてはカラスク文化期ないしそれ以前から存在しており、北方青

銅器文化の地域集団を構成していた可能性がある。こうした地域集団を特定ないしその存在を考古学的に認識するためにも、墓制研究は必要であると考えられるのである。特にユーラシア東部の北方青銅器文化の主要な分布地域であるモンゴル高原は、墓制とともに青銅器研究においても、ミヌシンスク盆地や長城地帯とは異なり、研究上遅れた地域である。そのモンゴル高原の墓制を明らかにすることは、この地域の牧畜社会を考えるにあたって必要な研究である。そして、そのモンゴル高原の東半部を主要な分布地域とする板石墓の動態を明らかにすることは、中国北辺の長城地帯との社会関係を考えるにあたって重要なものとなるであろう。また、板石墓に関しては文献史にみられる東胡との関係を説く議論もみられる（吉本2008）。しかし、基本的には板石墓の変遷と歴史的な位置づけが為されてはじめて、そうした民族名との対応に関する議論を為すことができるのであり、板石墓そのものの研究がまずは必要であると言えよう。そして、北方地域の匈奴が成立する以前の北方諸民族を考古学的に位置づけるためにも、モンゴル高原の墓制研究は重要であり、その中でもとりわけ板石墓研究は重要と考えられる。

2. 研究史と問題の所在

板石墓は沿バイカル地域にも分布が及んでいることから、板石墓の調査は20世紀前半からロシア人研究者によって既に進められていた⁽¹⁾。そうした調査はボロフコヤソスノフスキーによって行われるが、特にソスノフスキーはブリヤート・モンゴルで行った50基の板石墓を三つに分類している。1 型式は高く囲壁した石で囲まれるもの、2 型式は四隅が高く平らな石で囲むもの、3 型式は縁石が内湾した平らな石で囲む（撥形墓）ものである。1 型式が前7～前4世紀あるいは前6～前3世紀と考え、2・3 型式を前3～前2世紀と考えて、板石墓をカラスク文化と匈奴の間に位置付ける。ソスノフスキーの型式ごとの年代推定には現状では問題があるものの、板石墓の大きな位置づけとしては妥当なものであり、何よりも板石墓の分類は今日のモンゴル考古学

界においても分類の原点として用いられている（체벤도르지 2009）。

その後、キセリエフ、オクラドニコフ、キズラソフが板石墓地の調査を行い、板石墓研究を前進させた。キセリエフは板石墓が列をなすことから列墓をなした氏族墓地と考える。そしてキセリエフは、40年間に渡る自身の研究を踏まえて、板石墓がスキタイ・タガール文化の中央アジアを介しての影響関係によって成立することを述べる。また、オクラドニコフは、板石墓の発生は紀元前 2 千年紀半ばとし、今日的な見解を既にこの段階で述べているが、板石墓をカラスク文化とタガール文化の統一した文化とする。また、匈奴が板石墓文化人たちを押しだし、これらが異なった社会集団であると推定する。

ディコフは沿バイカル地域で板石墓の調査を進め、板石墓を沿バイカル地域の青銅器時代とした。そして、ソスノフスキーの 1 型式が前 7 ～前 6 世紀で、2 型式が前 5 ～前 2 世紀と認め、3 型式の撥形墓が板石墓の開始期とするものであり、相対的な編年は現在においても妥当と考えられる。ディコフもオクラドニコフと同様に板石墓と匈奴との文化的な関連を否定する。

一方でボルコフはディコフの年代を指示しながら、板石墓がモンゴルの東部に分布していることを主張した。また、モンゴル人学者であるナバンのように紀元前 1 千年紀の板石墓と匈奴が並存関係と見る見解も見られる。

その後も、モンゴルが事実上ソ連邦下にあることから、ロシア人学者による板石墓研究が主体となっている。グリシン、ノブゴルドバ、チレノヴァ、ラリチュフなどの研究が為されたが、体系的な研究とはなっていない。ディコフとグリシンは南沿バイカルの研究を組織し、東西沿バイカルを区別し、その間の違いを求めた結果、そうした差異が南モンゴルで合体したとする。しかし、局地的な調査に限ったため板石墓を歴史的に解釈するという歴史構築の基礎を築けなかった。ソ連邦時代のロシア人研究者を中心として行われた調査や研究史をまとめ、さらに自身の調査を踏まえて、板石墓の体系的な研究をまとめたのがツヴィクタロフである（Цыбиктаров 1998）。

ツヴィクタロフは、板石墓の構造を型式学的に理解すべきことを主張し、チルト期とアツツアイ期に分類・分期する。この分類は結果的にはソスノフス

キーの1・2類にほぼ相当するものであるが、分類とともに型式変化を想定したところに長所がある。それまで板石墓の年代観として、スキタイ・タガールの遺物から前7～前3世紀とする短期編年とオクラドニコフなどのように紀元前2千年紀後半から前2世紀という長期編年が対立していた。この段階で、ツヴィクタロフは、スキタイ・タガール文化の遺物の年代観から、チルルト期を前13～前8世紀、アツツアイ期を前8～前6世紀と考えた⁽²⁾。そして板石墓の範囲が、モンゴル高原から中国東北部に渡るものであることを明らかにする。さらにモンゴル高原の青銅器時代墓としてのヘレクスールと板石墓の分布を区分し、前者がモンゴル高原西部を、後者がモンゴル高原東部を中心とするものとする。

一方で、板石墓の起源問題について土着起源（オクラドニコフほか）とカラスク時代の初期青銅器住民によるもの（ソスノソフスキー、ディコフ、ヴォルコフほか）という意見が対立している。このことは、板石墓の終末後に匈奴との関連があるかないかということとも関連した問題である。なお、ツヴィクタロフは、板石墓と匈奴墓との間には断絶が存在するという考え方を示している（Цыбиктаров 1998）。

ロシア連邦崩壊後、モンゴル国の建国は、モンゴル考古学をモンゴル人学者自らが主体的に調査研究できるようになった。しかし、板石墓の研究にあつてはモンゴル人考古学者による体系的な研究は進んでいない。むしろ、アメリカやロシアとの共同調査によって飛躍的に発掘調査が進み、モンゴル青銅器時代墓制にとってヘレクスールに対する別の墓制としての位置づけが為されている（Honeychurch et al. 2009）。

この中で、コヴァリエフやエルデンバートルは、モンゴル高原の青銅器文化墓制をアフアナシェヴァ文化、チェムルチェク（Chemurchek、切木爾切克）文化、ムンク・ハイルハン（Munkh-Khairhan）文化、テブシ（Tevsh）文化、バイタグ（Baitag）文化と呼び、この順に変化するとする。この内、チェムルチェク文化は、西ヨーロッパに起源し、カザフスタンを通じてアルタイに伝わったもので、石人像をともなった石造墓制でアルタイを中心とする紀元前4000年

紀の墓制とする（Ковалев & Эрдэнебаатар 2012、에르덴바атар 2012）。チェムル
 チェク文化の位置付けに関しては、モンゴル青銅器時代の開始期の墓制を考
 える意味で極めて重要であるが、本論では板石墓に関して検討することから、そ
 の検討は別の機会に残しておきたい。また、ムンク・ハイルハン文化は紀元
 前1700～紀元前1400年にかけてモンゴル中・西部に分布する墓制であると述
 べており（Kovalev & Erdenebaatar 2009、A・A・科瓦列夫・額爾德涅巴德爾
 2009）、日蒙共同調査隊がボル・オボーで発掘したものがこれにあたる（宮本
 2015b、宮本一夫ほか 2015）。その後のテプシ文化が撥形墓の板石墓に相当す
 るものである。ソスノフスキーの言う3類である撥形墓を独立した文化の墓
 制として提起した。さらに、バイタグ文化とされるものは、ホブド県などアル
 タイ地区に存在するカラスク文化の墓葬（Legrand 2006）に相当する。これら
 は紀元前4000年紀から紀元前2000年紀の墓葬であり、モンゴル高原西部を中
 心に展開する墓制であり、モンゴル高原周辺部であるアルタイ地区やミヌシ
 スク地域の墓制との関係から検討されるべきものである。また、近年ではソス
 ノフスキー1類である方形墓をウランズーク（Ulaanzuukh）文化として捉え、
 モンゴル高原東南部に存在している文化とする考え方（Tumen et al. 2014）も
 見られる。

このように近年のモンゴル高原の墓葬研究は安易に文化設定がなされる一方
 で、墓葬の系譜的な変遷やその地域間関係には注意が払われていない。体系的
 な板石墓研究のためには、まずは墓葬構造の分類とその型式変化を明らかにし
 ていかなければならないであろう。その際、本稿ではモンゴル高原中・東部に
 分布するとされる板石墓を中心に検討し、併せて板石墓と関係するヘレクス
 ールなどモンゴル高原西部の青銅器時代墓葬の動向も勘案しながら、墓葬から
 見た地域間関係を明らかにしていきたい。

3. 分析方法

嘗てツヴィクタロフが述べた（Цыбикгаров 1998）ように、板石墓の構

造からの分類と編年という考古学の基本原則に立ち戻るべきであろう。私も2009年以來、モンゴルでの共同発掘調査に参加し、板石墓の構造について知る機会を得た（宮本2015a）。特に、墓葬の築造過程を復元することができ、これにより構造分類が容易になった。とともに副葬品を持たない板石墓の場合、古人骨の放射性炭素年代（較正年代）から、年代軸に容易に載せることが可能になった。ここでは、これまでの学史を踏まえた地表石造物の構造からの型式分類とともに、地表下の墓壙の構造をも加味しながら、分類の妥当性を探るとともに、型式変化の方向性を理解してゆきたい。とりわけこれまでソスノフスキーらによって型式分類されてきた3類といった分類は、ツヴィクタロフも述べたように年代差を示す場合もあるが、型式変化を示すものというよりは各型式がそれぞれ変化を示す組列である可能性が高い。こうした見方から新たな分類とともに、型式変化の方向性を探って行きたい。

また、チェムルチュク文化の起源を他地域に求め、伝播過程によってモンゴル高原へもたらされたと考えられている（Ковалев & Эрдэнэбаатар 2012、예르덴바атар 2012）ように、周辺地域とりわけ墓葬が同じような石像構造物から成り立つミヌシンスク地域の墓葬との対比は重要であろう。しかも、青銅器時代にあつてミヌシンスク地域からモンゴル高原さらには長城地帯にあつては、北方青銅器文化のカラスク文化やタガール文化といった同じ青銅器様式圏に属する地域である。こうした同じ青銅器様式圏にあつての、墓葬構造の違いや系譜の違いは、墓葬習俗を営む集団の社会単位の違いを示している可能性がある。こうした集団単位の復元はこれまで知られたことのなかったモンゴル高原の青銅器時代における社会復元に繋がるとともに、その後の匈奴遊牧国家への社会統合の過程を復元することができるであろう。

4. 板石墓の分類と編年

モンゴル高原の板石墓は、方形・長方形ないし撥形の縁石で取り囲まれた空間に石を充填した石造構築物が地上に構築され、その石造構築物の地表下に墓

壙を一つ持つといった構造から成り立っている。円形の石造墳丘を持ち、円形ないし方形の囲い石列と地上の墳丘内に埋葬されるヘレクスールとは墓葬構造を全く異にしている。犠牲獣も基本的に板石墓では墓壙内になされるが、ヘレクスールは囲い石列の外側の石碓下になされている。ヘレクスールの石碓での動物犠牲は、犠牲獣である馬の埋置方向から、馬が最も肥えた晩秋にヘレクスールに集まり祭祀活動がなされるといった解釈 (Allard 2005) もあるように、埋葬後の祭祀と考えられている。このように埋葬に伴う犠牲獣の板石墓と埋葬後の犠牲獣であるヘレクスールとでは、犠牲獣の習俗も異なり、二つの墓制は全く異なった系統にあるものであることが理解される。

板石墓の編年は、研究史でも見てきたようにツヴィクタロフによってなされているが、その分類は基本的にはソスノフスキーのものと同一である。ここでもソスノフスキーやツヴィクタロフの分類を基に、それらを墓葬構造変化の組列としてとらえ、さらにその細分の基準に縁石の平面形態や側面形態、あるいは縁石の周りに控え石を置くか否かを基準に細分と変化方向を推測する (Миямото 2013)。

ソスノフスキーは、縁石が方形ないし長方形であるもので、四隅石が突出しないものをⅠ式、同じ縁石構造であるが四隅石が他の縁石より高く突出したものをⅡ式、縁石が方形・長方形ではなく、縁石の長側辺が内湾して縁石の平面

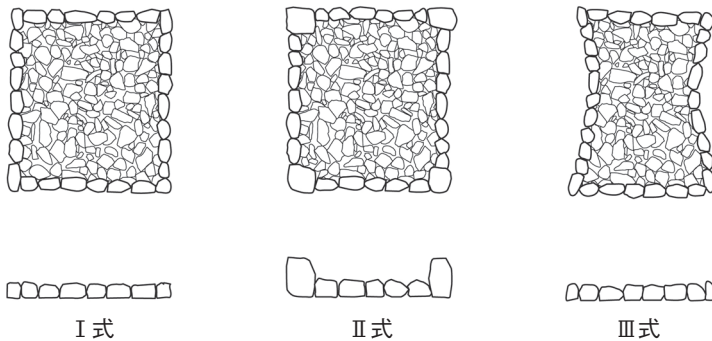


図1 板石墓の分類

形態が撥形を呈するⅢ式に分類している（図1）。このような縁石構造の特徴によるソスノフスキー・ツヴィクタロフの分類に加え、上記した他の属性を付加することによって、細分することができる。特に細分基準の一つである縁石の外側に控え石を持つか否かの区分が重要である。縁石は本来墓葬の地上構造物のまさに縁を構成するものであり、縁石部分を方形にやや掘り込んで、その土壌に沿うように固定してその内側に人頭大の石を充填する構造から成り立っていた（図2-1）。しかし、そうした地上石造構造物の縁石の掘り込みを持つことなく、縁石の外側に控え石を置き内側に石を充填することで縁石は固定され（図2-2）、地上石造構造物を簡易に地表面に構築することができる。そうした構築法の簡易化の変化方向からは、縁石の外側の控え石のないものからあるものへと変化していると考えられるのである。

この様に、Ⅰ式は縁石の外側に控え石ないものと控え石があるものに区分し、それぞれをⅠa式とⅠb式に区分する。Ⅰa式は控え石を持たないで縁石の平面形が方形ないしそれに近い長方形のものからなり、さらにⅠb式は縁石の平面形が長方形で控え石を持つものである。Ⅰa式からⅠb式といった変化方向を推測することができる（図2）。

Ⅲ式は、*фигурные могилы* (Figured grave) と呼ばれる縁石の長側縁が内湾しており、縁石の平面形が撥形を呈するところから、撥形墓と呼ぶものである（宮本2015a）。縁石の長軸と短軸が等しいないしあまり大差のない方形に近いもの、あるいは長方形であるが、縁石の長側辺がやや内湾して四隅の突出が激しくないものをⅢa式（図3-1）、縁石の長軸が短軸より長く伸びて長方形を呈し、長軸側辺の内湾度が高まることにより四隅の突出が顕著になるものをⅢb式（図3-

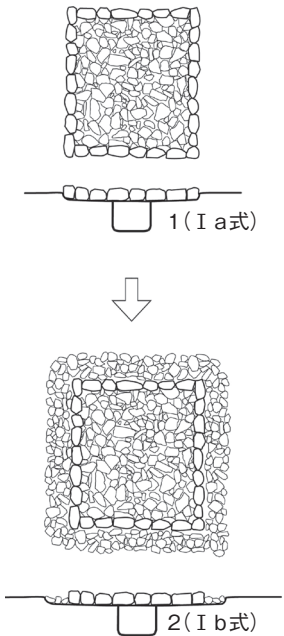


図2 Ⅰ式板石墓（方形墓）
の分類と変遷模式

2)と区分することができる。近年、甘肅から内蒙古の陰山山脈一体で発見された四隅が方形を呈する井字形の撥形墓(馬健2015)も、このⅢb式の一様としておきたい。後に述べるテブシ板石墓の事例を普遍化するならば、Ⅲa式からⅢb式へと変化したものと見なすことができる(図3)。このほか、板石墓の変形したものと考えられる平面馬蹄形のもの(Kovalev & Erdenebaatar 2009、科瓦列夫・額爾德涅巴德爾2009、馬健2015)も存在する。これをⅢc式(図

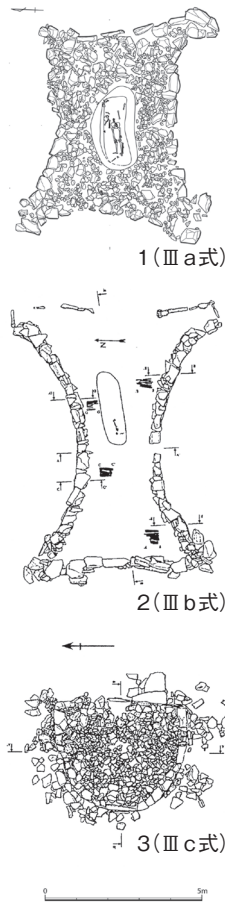


図3 Ⅲ式板石墓(撥形墓)の分類(1 Tevsh3号墓、2 Baruun Gyalaat 2号墓、3 Baruun Gyalaat 1号墓)

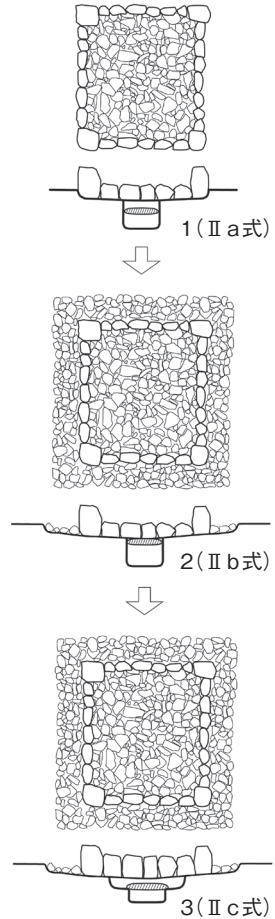


図4 Ⅱ式板石墓の分類と変遷モード

3-3)と設定しておきたい。そのⅢ式内での年代的な位置づけは相対的に新しいものとするができるが、その形態的な系譜関係は不明である。

Ⅱ式は縁石の平面形は基本的に長方形であり、縁石の四隅が他の縁石より立ち上がる四隅石を持つタイプであり、典型的な板石墓である。Ⅱ式も縁石の外

側に控え石を持つタイプと持たないタイプに分けることができ（図4）、前者のⅡa式から後者のⅡb式への変化を想定することができる。さらに控え石を持ちながら縁石が相対的に大型化したものをⅡc式とする。このⅡc式は、控え石の機能によって縁石が大型化することが可能となったとすることができ、Ⅱb式からⅡc式への変化を考えることができる。したがって、Ⅱa式→Ⅱb式→Ⅱc式といった変化方向を想定することができる（図4）。

こうした地上石造物の構造に基づく分類に加え、地表下にある死者を安置する墓壙の構造との対比から、上記の分類や変化方向の妥当性を検証して行きたい。Ⅰ式～Ⅲ式までは基本的に地表下に土坑状の墓壙を持つものであるが、墓壙上面に蓋石を持つか持たないかで区分することができる。Ⅰ式とⅢ式は墓壙上面に蓋石を持たず（図2・3）、埋葬後ある段階で墓壙上面の縁石内に充填された石が落ち組む状態が見いだされる。それに対して、Ⅱ式は基本的に土坑状の墓壙上面に蓋石を持ち、縁石内の石が墓壙内に流れ込むことはない（図4）。また、Ⅱ式の変化方向に応じるように、Ⅱa式では1枚の比較的大きな蓋石が使われるのに対し、Ⅱb・Ⅱc式では3枚など複数の蓋石が墓壙を覆うように配置される。さらにⅡc式では、Ⅱa・Ⅱb式が一つの土壙から墓壙が形成されていたのに対し、二段墓壙が形成されており、比較的大きな墓壙の中央にさらに木棺を安置するような形での墓壙が作られている（図4-3）。

また、これら板石墓と呼ばれるⅠ～Ⅲ式の被葬者の頭位は、一般的に東向きである（채벤도르지2009）。また、Ⅰ式・Ⅱ式の土壙には一般的に仰身葬で、Ⅲ式は俯身葬で被葬者が安置されるのが普通であり、それぞれの墓葬形式によ

表1 属性組成による板石墓の型式分類

方形縁石	撥形縁石	四隅石	控え石	蓋石	土壙	型式名
○	×	×	×	×	○	Ⅰa
○	×	×	○	×	○	Ⅰb
×	○	×	×	×	○	Ⅲa
×	○	×	○	×	○	Ⅲb
○	×	○	×	単数	○	Ⅱa
○	×	○	○	複数	○	Ⅱb
○	×	○	○	複数	二段土壙	Ⅱc

表2 板石墓の型式別実年代

墓番号	地名	県名(州名)	型式	大きさ	埋葬方法	頭位	蓋石	副葬品	年代(cal BC)	出典
Ulanzuukh Row 1A (3)	Aeglin Gol	Sukhbaatar	I a	4.1 × 4.0	土壇	NE	0		1423-1288	Tumen et al. 2010, Tumen et al. 2014
Ulanzuukh Row 1D (5)	Aeglin Gol	Sukhbaatar	I a	4.6 × 3.4	土壇	NE	0		1325-1192	Tumen et al. 2010, Tumen et al. 2014
Ulanzuukh Row 2-6	Aeglin Gol	Sukhbaatar	I a					銅泡18	1456-1369	Tumen et al. 2014
Ulanzuukh Row 2-3	Aeglin Gol	Sukhbaatar	I a						1322-1187	Tumen et al. 2014
Ulanzuukh Row 2-2	Aeglin Gol	Sukhbaatar	I a						1443-1313	Tumen et al. 2014
Chandomani Khar Ulul 2-p	Delgerekh	Dornogovi	I a	4.2 × 2.8	土壇	NE	0		1530-1380	Амаргувшин et al. 2015
Chandomani Khar Ulul 5-p	Delgerekh	Dornogovi	I a	6.7 × 5.7	土壇	NE	0	凹石	1440-1250	Амаргувшин et al. 2015
Chandomani Khar Ulul 33	Delgerekh	Dornogovi	I a	4.3 × 3.1	土壇	NE	0	玉	(1500-1250)*1	Амаргувшин et al. 2015
Bituoguin Tsagaan 2-p	Xiyag-Uudur	Bylgan	I a	6.5 × 6.5	土壇、俯身		0		(1116-906)*2	Торбег et al. 2003
Chandomani Khar Ulul 41	Delgerekh	Dornogovi	I b	5.4 × 4.3	土壇	NE	0	髑	1440-1190	Амаргувшин et al. 2015
Chandomani Khar Ulul 130	Delgerekh	Dornogovi	I b	3.0 × 2.1	土壇	E	0		1400-1120	Амаргувшин et al. 2015
Tavan Khaiaasi 3-No.1	Delgerhan	Henry	I b	3.8 × 3.2	土壇、仰身	E	0		835-804	白石編2013
Daram No. 9	Delgerhan	Henry	I b	4.7 × 3.8	土壇	E	0		896-806	Miyamoto & Obata 2016
Daram No. 2	Delgerhan	Henry	I b	4.0 × 2.5	土壇	E	0		769-407	Miyamoto & Obata 2016
Orog Hyur 85-p	Bogd	Baiankhongol	I b	3.2 × 2.5	土壇、仰身	NE	0		1220-900	Гунчинсүрэн et al. 2010
Chandomani Khar Ulul 31	Delgerekh	Dornogovi	III a	11.5 × 7.7	土壇	E	0		1500-1250	Амаргувшин et al. 2015
Bega Gazayn Chuluu 1	Adaatsag	Dundgovi	III a	4.8 × 3.2	土壇	NE	0	銅刀子、銅鏃、磨石、土器	1390-1110	Амаргувшин & Жапргалан 2008, Nelson et al. 2009
Tevsh No. 3	Bogd	Uvunhangai	III a	6.5 × 6.0	土壇、俯身	E	0		1392-1264	Miyamoto & Obata 2016
Tevsh No. 1	Bogd	Uvunhangai	III b	8.5 × 7.5	石壇、仰身	W	0		901-812	Miyamoto & Obata 2016
Barun Gyalaat 2	Baiating	Baiankhongol	III b						1270-970, 960-930	Kovalev & Erdenebatar 2009
Bor Ovo No.8	Bogd	Baiankhongol	III b						1112-974	宮本ほか2015
Ulanboom 16	Taishir	Gobi-Altai	III b	10 × 4	土壇	E	0		1270-970	Амаргувшин & Аларвухч 2010
Daram No. 4	Delgerhan	Henry	II a	8.5 × 7.5	土壇	E	1	銅泡3、玉1000	786-129	Miyamoto & Obata 2016
Daram No. 41	Delgerhan	Henry	II b		土壇		3	土器片	404-205	Miyamoto & Obata 2016
Daram No.1	Delgerhan	Henry	II c	4.3 × 4.2	土壇	E	3	土器片	479-381	Miyamoto & Obata 2016

* 1 報告では3450-3200年と表記されていたが、これはB-P年代と考え、B-C年代として変換した。
* 2 この年代は未校正年代の可能性がある。

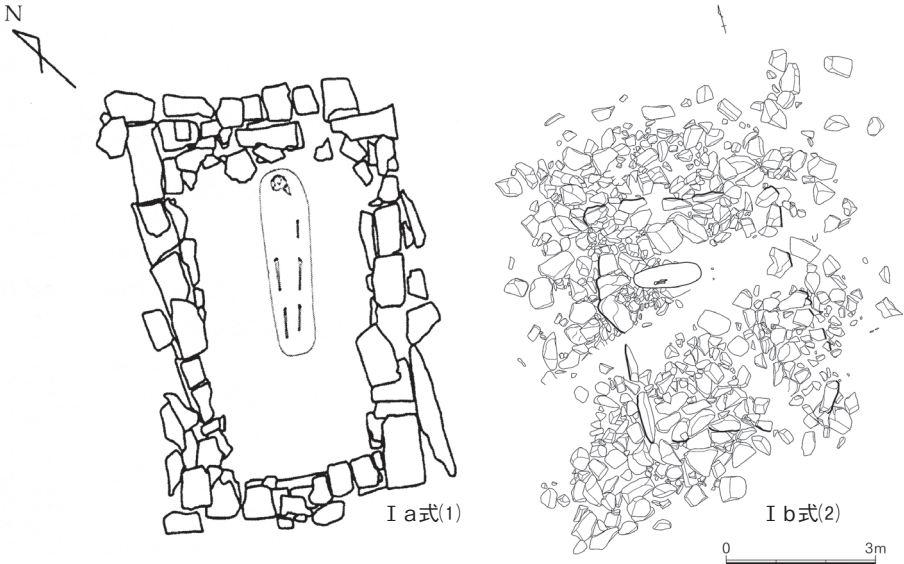


図5 方形墓の事例
 (1 Bulgiin Ekh, 2 Daram 9 号墓 縮尺1/150)

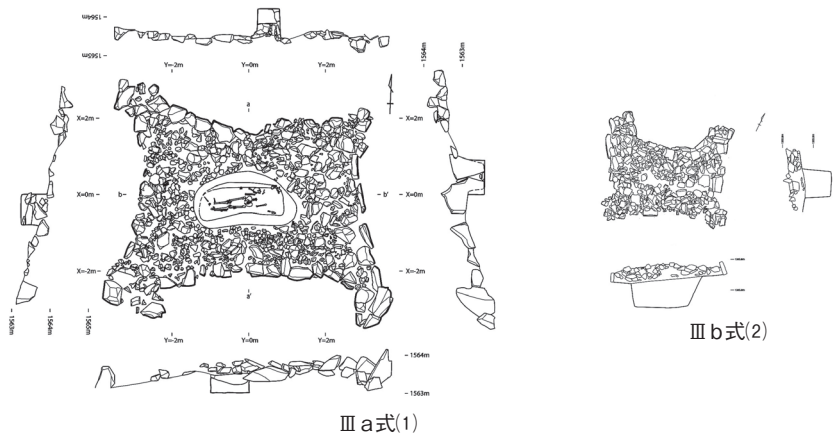
り独自の葬法の伝統をもっている。これはこうした墓葬形式を持つ集団が個々に独自の葬法を持っていることを示しており、背景にある集団の違いや社会単位の差異を物語っている可能性がある。

このような各型式の板石墓で、 ^{14}C 年代が判明しているものの内、地上部の石造構造物の属性（縁石の平面形、四隅石の有無、控え石の有無）と地表下の墓壇の属性（蓋石の有無、蓋石の個数、二段墓壇の有無）といった属性間の組み合わせを示したのが表1である。これによって、墓葬構造の属性の組み合わせが先に示した型式と矛盾なく対応していることが示されたであろうし、属性の変化方向の推定とも矛盾なく組み合わせられていることが確認できたであろう。さらにこれらの墓葬の被葬者ないし動物犠牲の ^{14}C 年代（ 2σ ）を提示し（表2）、型式における変化方向の推定との相関関係を論証してゆく。

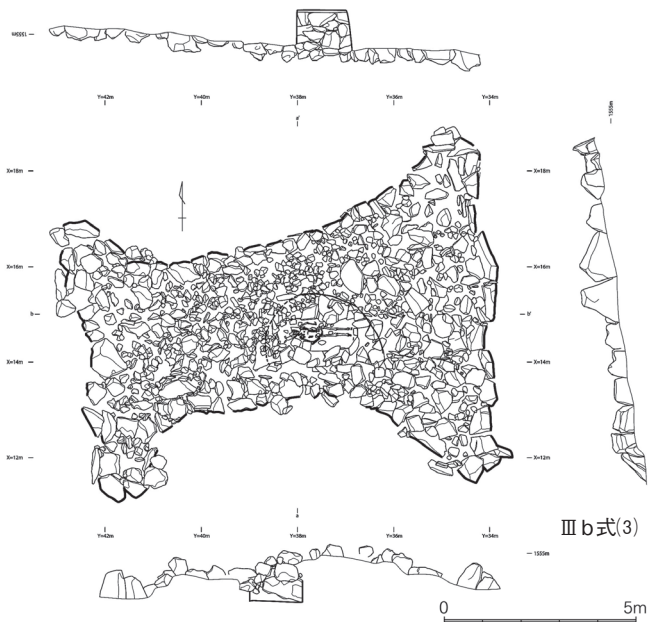
I式は近年モンゴル高原東部で発見され、ウランズーク（Ulaanzuukh）文化と呼ばれるものが当たる（Tumen et al. 2014）。その大半がI a式であり、表2

に示されるように、BC1456～BC1187年の年代値が示されている。その代表的な墓葬はウランズークやでブルギーン・エク (Tumen et al. 2014, Түмен et al. 2010) である。ブルギーン・エク (Bulgiin Ekh) は¹⁴C年代が示されていないが、縁石が方形に近い長方形を示し、さらに地表下に墓壙を持つものである(図5-1)。この場合、墓壙は比較的幅が狭く浅いものであり、被葬者をそのまま安置したものと考えられるが、その位置が必ずしも縁石内部の中心にあるのではなく、すこし偏った地点にあることに特徴がある。また、I b式としては、ダーラム9号墓(図5-2)やタワン・ハイラースト第3地点1号墓(白石編2013)を当てることができるであろう。これは縁石の外側に控え石を持つものであるが、完全に縁石平面は長方形をなしている。墓壙も北側に偏った地点に認められる。その分布の中心はモンゴル高原中・東部に当たり、その中でもI a式に相当するウランズーク文化は、ウランズークやチャンドマン・ハル・オール(Chandoman Khar Uul, Амаргүвшин et al. 2015)のように、モンゴル高原東南部を中心地としている(Tumen et al. 2014)。さらに表2に示されるように、I a式は前16～前12世紀にあり、I b式は前15～前9世紀を中心としており、相対的な年代差が示されるとともに、I a式からI b式への型式変化を論証できたものと考えられる。

Ⅲ式は撥形墓と呼ばれる特殊な板石墓である。ツヴィクタロフの分布図によれば沿バイカルからウブスハンガイ県テブシまで比較的南北に幅広いが(Цыбиктаров 1998)、東西の分布はモンゴル高原中部を中心としているように見られる。さらに近年ではバヤン・ホンゴール県ボル・オボー(宮本ほか2015・宮本2015b)でも発見されており、モンゴル高原中部を中心としている状況に変化はない。Ⅲ式は、テブシ調査の人骨による¹⁴C測定年代によって(Miyamoto & Obata ed. 2016)、平面形が方形に近く側辺が浅く内湾するテブシ3号墓のⅢ a式(図6-1)から、長軸が長くなり長側辺が深く内湾するテブシ1号墓というⅢ b式(図6-3)の時間差が知られており、Ⅲ a式からⅢ b式への変化が想定される。テブシ3号墓のⅢ a式はBC1392-1264年、テブシ1号墓のⅢ b式はBC901-812年であり、ボル・オボー8号墓のⅢ b



III a式(1)



III b式(3)

図6 撥形墓の事例 (1 Tevsh 3号墓、2 Bol Ovoo 8号墓、
3 Tevsh 1号墓 縮尺1/200)

式（図6-2）も¹⁴C測定年代がBC 1112-974年（91.2%）と、想定された型式変化に対して矛盾のない測定年代を示している（表2）。墓葬の下部構造についてⅢ式は基本的に土壌であり、頭位が東側を向き俯せ葬である場合が多い。Ⅲb式のテブシ1号墓にあっては、その他の例と異なり、ヘレクスールと類似した地上に石櫛上に埋葬していくものであり、さらに頭位も西方向と得意な様相を示している。なお、Ⅲc式とした変形の馬蹄形のもの、バルーン・ギャリヤート（Baruun Gyalaat）1号墓でも出土しており（Kovalev

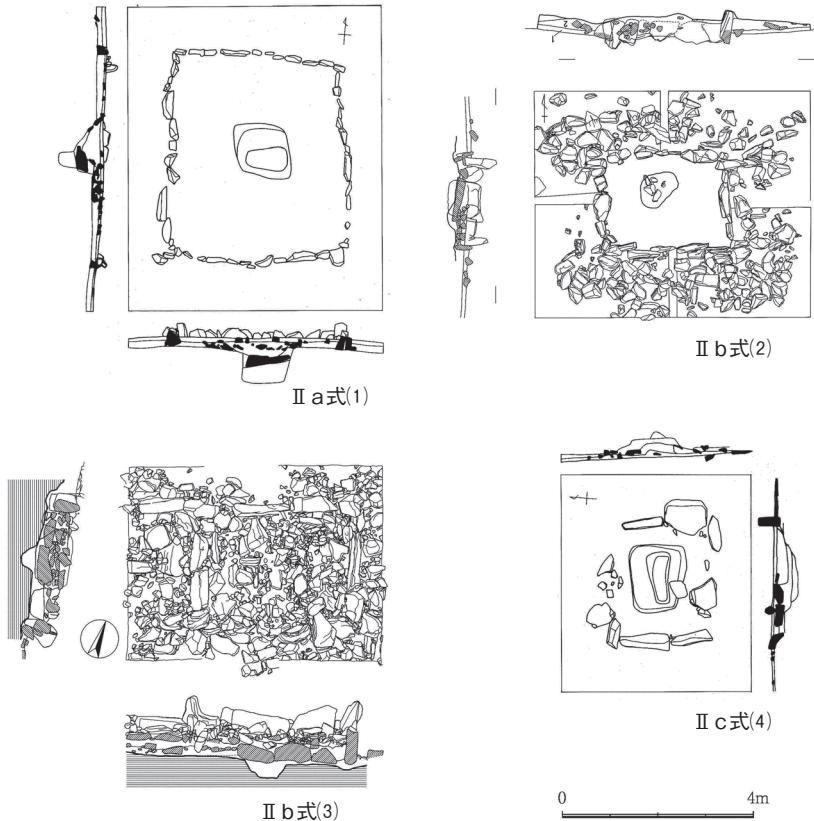


図7 板石墓の事例（1 Daram 4号墓、2 Daram 8号墓、
3 Daram41号墓、4 Daram 1号墓 縮尺1/160）

& Erdenebaatar 2009、科瓦列夫・額爾德涅巴德爾2009)、年代はBC1020-760年(95.4%)とⅢb式とほぼ同じ年代観が与えられるであろう。

Ⅱ式は長方形の縁石からなり、その四隅が立石である四隅石を構成している。Ⅱa式は縁石の外側に控え石を持たないものであり、四隅石も比較的低いダーラム4号墓(図7-1)を代表とするものである。これに対し、明確な四隅石を持ち縁石の周りに控え石を持つⅡb式は、ダーラム墓地では最も多いものであり(Miyamoto & Obata ed. 1916)、ダーラム8号墓(図7-2)やダーラム41号墓(図7-3)などがその代表的なものである。さらに、縁石自身が大型化し、縁石全体が高くなるⅡc式は、縁石の周囲の控え石によって構築が可能になった構造である。ダーラム1号墓(図7-4)やウラン・オシーク板石墓(高濱2006)などが代表例であろう。これらの年代は、ダーラム墓地の炭素年代で示されたように(宮本2015a、Miyamoto & Obata ed. 1916)、Ⅱa式→Ⅱb式→Ⅱc式という相対的な変化を認めることができる。さらに、Ⅱ式にはⅠ・Ⅲ式がほとんど副葬品がなかったのに対し、土器、石製装身具、青銅装身具などの副葬品を一般的に持つことが特徴としてあげることができるであろう。なお、Ⅱ式の発掘はドンド・ゴビ県バガ・ガズリン・チュルー(Baga gazrin chuluu)遺跡(Амартувшин & Ханичёрч 2010)やトゥヴ県エルデネ(Erdene)遺跡(서울대학교 고고미술사학과ほか2008)などでも行われているが、残念ながら良好な炭素年代が示されていない。

5. 板石墓の変遷と地域的展開

以上のように、板石墓は方形墓と撥形墓が当初存在し、その後、典型的な板石墓であるⅡ式が出現するに至る。そうした典型的な板石墓であるⅡ式のみを板石墓と今後呼ぶならば、方形墓、撥形墓、板石墓は図8のような変遷図にまとめることができる。そして、板石墓の出現は今のところダーラム4号墓の例からおよそ前8世紀といえることができるであろう。ユーラシア東部の青銅器文化の区分からいえば、この変化時期はカラスク文化期からタガール文化

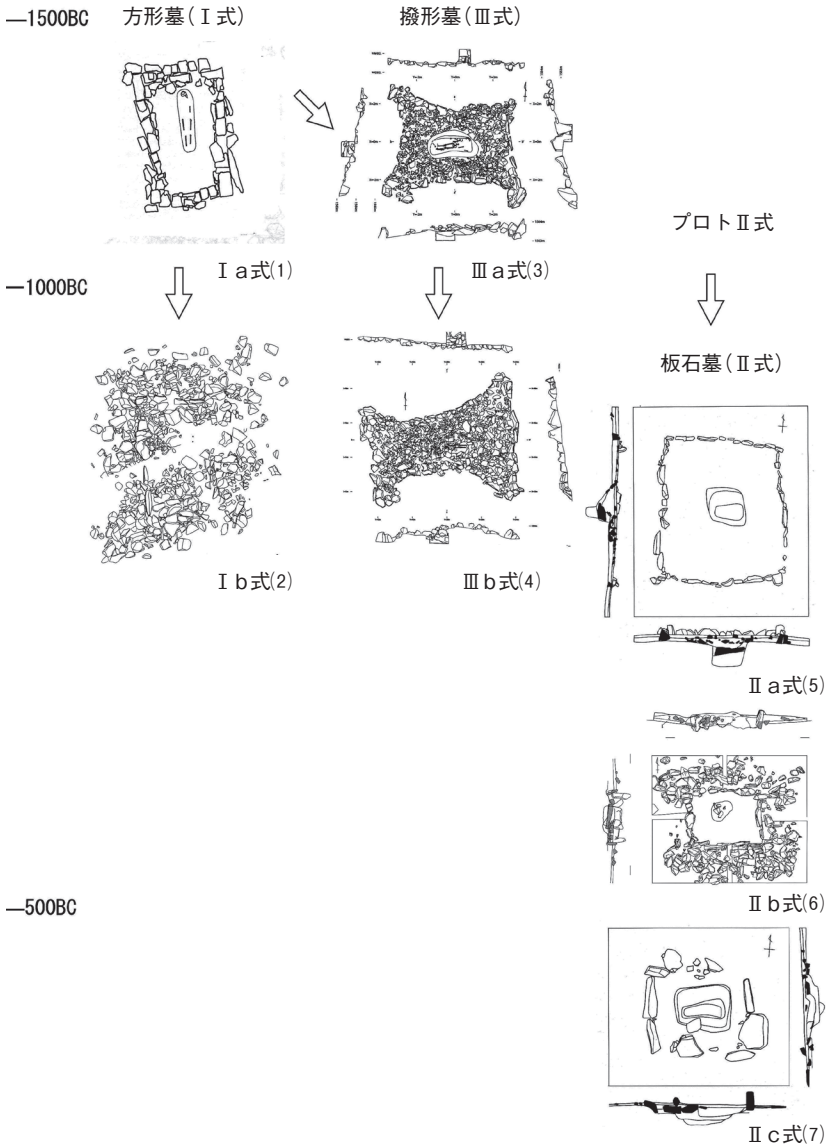


図8 モンゴル高原中・東部の青銅器墓葬の変遷 (1 Bulgiin Ekh、2 Daram 9号墓、3 Tevsh 3号墓、4 Tevsh 1号墓、5 Daram 4号墓、6 Daram 8号墓、7 Daram 1号墓)

期への変化時期に相当する。

ツヴィクタロフによれば、方形墓や撥形墓を含む板石墓の分布は、モンゴル高原東部であり、西部にはヘレクスールが存在するとする。一方で、モンゴル高原西部の青銅器時代墓葬の編年でコバリエフやエルデネバートルは、アフアナシェヴァ文化、チュムルチェク文化、オクネフ文化の後にヘレクスールに類似した円形のクルガンをもつムンク・ハイルハン文化をおき、その後に撥形墓であるテブシ文化を設定し、さらにモンゴル西北端にカラスク文化墓葬に類似したバイタク文化を編年していく (Kovalev & Erdenebaatar 2009、科瓦列夫・額爾德涅巴德爾 2009、에르덴바타르 2012)。このムンク・ハイルハン文化の墓葬は、ウブル・ハンガイ県ボル・オボー遺跡でも発見されており、円形墓と呼んでいるものに当たる (宮本一夫ほか 2015、宮本 2015b)。円形墓は、遺構の切り合い関係ならびに年代から明らかに撥形墓に先行するものであり、ムンク・ハイルハン文化からテブシ文化への変遷は妥当であるとなることができるとする。円形墓は墓葬構造から見ればヘレクスールとは異なり、むしろミヌシンスク地域のカラスク文化期の墓葬 (Legrand 2006) に近いものがある。こうした円形墓やヘレクスールがモンゴル高原西部を中心にカラスク文化期に分布していることになる (Цыбиктаров 1998、宮本 2007)。同じカラスク文化期にはすでに示したように方形墓と撥形墓が存在している (図 8)。方形墓と撥形墓はそれぞれ I a 式 → I b 式へ、III a 式 → III b 式へと変化していくが、すでに指摘したように分布の状態から I a 式の中心地はモンゴル高原東部にあり、これが次第に西方へと広がる過程で方形墓が変形する形で撥形墓が成立したのではないかと推測される。近年、内蒙古陰山地区にも撥形墓が分布していることが明らかとなった (馬健 2015)。従って、撥形墓の分布の中心は沿バイカル地域からテブシといったモンゴル高原中部に分布が偏るのであり (Цыбиктаров 1998)、さらに内蒙古陰山地区というモンゴル高原中部の南端まで広がっている。また、ボル・オボー遺跡などもともと円形墓が分布していた地域にも、撥形墓の分布が広がっていったものと考えられる。

さて、こうした場合、典型的な板石墓である II 式の成立が問題になるところ

である。方形区画で四隅石があり、周りに控え石を配置しないⅡ a 式が最も古いものであり、こうした墓葬の出自をどう考えるかにある。方形区画で控え石のない構造はⅠ a 式に近いものがあるが、四隅石の成立が問題である。仮に撥形墓であるⅢ 式の区画縁石の内湾化による四隅部の強調が、その後、四隅が他の縁石に比べ立ち上がる四隅石の存在を促す過程も想像されるが、この仮説に関する論証は難しい。むしろ類似した墓葬構造、とりわけ四隅石と方形の区画縁石を持ち控え石を持たないⅡ a 式に最も類似したものは、ミヌシンスク地域のタガル文化期の最も古い段階にあるバイノフ期 (Грязнов et al. 1980、Bokovenko 2006) の墓葬構造に近い。この時期のものは基本的に板石墓のⅡ a 式の構造と同じであり、かつ墓壇も地下にあり 1 枚の蓋石で覆われることもある。まさにダーラム 4 号墓と同じ構造をなしているのである。なお、ミヌシンスク盆地では、バイノフ期の墓葬構造から次第に縁石内部の石の充填が充実し、次第にこの部分がクルガン状にマウンドを形成するように大きくなるとともに、縁石構造も次第に発達していく (Bokovenko 2006)。その点ではⅡ 式のⅡ c 式の発展方向とは異なった発展方式を描くことができるであろう。こうした場合、ミヌシンスク盆地から内蒙古東部までの広い地域に板石墓が広がっているとすることができるが、それは板石墓の初段階のみであり、少なくともその後はミヌシンスク盆地とモンゴル高原中・東部の板石墓の変化方向は異なるものであったと言えよう。また、ミヌシンスク盆地のバイノフ期は前 10 ～ 前 8 世紀とされており (Bokovenko 2006)、モンゴル高原中・東部の板石墓の初期段階である前 8 世紀のⅡ a 式より古いものであり、ミヌシンスク地域からタガル文化の広がりとともに、西から東へと板石墓は広がっていった可能性がある。すなわち、タガル文化という新しい青銅器文化のユーラシア東部での広がりには合わせる形で、墓葬構造である板石墓が広がり、その後は地域的に板石墓の変遷を示しているとするところができるであろう。

一方で、これまでヘレクスールと分類されたものの中に、Ⅱ a 式に近いもの、あるいはⅡ a 式と言ってよいものが認められる。たとえば、フヴスグル県ツァヴガンジン・ウラン・オール 2 号墓では、4.3 × 4.0 m の方形墓でありながら

四隅に立石を持つ（Амгалантөгс et al. 2007）。人骨の年代は1267-993calBCで、ヘレクスールと同時期である。また、ゴビ・アルタイ県ヒヤウル・ヒヤラーチ 1 号墓も、8.0×8.0mの方形墓で四隅石を持っており、人骨の年代は1265－1108calBC（94.2%）とヘレクスールと同時期である（宮本ほか2016）。どちらも石造構造物の地下に土壌を持ち、そこに埋葬人骨が認められる。埋葬構造から見れば、Ⅰ式に近い構造であるが、四隅石がある点ではⅡ式の範疇に入るものである。しかし、ヒヤウル・ヒヤラーチ 1 号墓の場合、石造構造物の中心部分がマウンドをなし、上円下方墳のような構造をなしており、板石墓の一般的構造ともやや異にしている。ツァヴガンジン・ウラン・オール 1 号墓やサルヒイミン・ハル・ハブ 3 号など（Амгалантөгс et al. 2007）では、四隅石をもつ方形の囲い石からなるヘレクスールがあり、ヒヤウル・ヒヤラーチ 1 号墓などもこうしたヘレクスールのケルン部分と方形の囲い石部分が石敷きで連結することによってできあがった可能性も想像することができるであろう。どちらにしろ、このようなⅡ a 式がモンゴル高原西部のヘレクスール時期に存在していることは間違いない。そして、ツァヴガンジン・ウラン・オール 2 号墓やヒヤウル・ヒヤラーチ 1 号墓のような方形墓のⅠ a 式に類似しながらも四隅の立石を持つ点からは、Ⅱ a 式の祖形になり得る墓葬である。また方形墓の中心部分がケルン状の墳丘を為す点も、Ⅱ a 式とは異なっている。しかも年代は一般的なヘレクスールの年代に相当し、Ⅱ式の一般的な板石墓より年代が遡るものである。そこでこうした型式の方形墓をプロトⅡ式と呼ぶことにしたい。プロトⅡ式はフブル・ゴル県ウラーン・トルゴイ（Ulaan Tolgoi）遺跡（Fitzhugh ed. 2005, p. 66, Fig.5.9a）にも見られ、その分布はモンゴル高原西部にある。

このように、Ⅱ a 式がプロトⅡ式から生まれたとすると、先に想定したミヌシンスク地方のタガール文化初期であるバイノフ期のものは、年代的にもプロトⅡ式より遅い段階のものであり、これをⅡ a 式の出自にすることはできない。グリヤズノフがカラスク期からタガール期の移行期としてまとめたバイノフ期は、ラザレトフによれば二つに分かれることができ、カラスク文化末期段階の

ものと、バイノフ期のものに分かれる。そして後者のバイノフ期は、カザフスタンあるいはモンゴル高原西部から文化的な波及によるものとする考え方である（Лазаретов 2007）。この考えによれば、モンゴル西部のプロトⅡ式がバイノフ期の方形墓で四隅石を持つ墓葬構造をもたらした可能性を提起することができよう。この問題は、タガール文化の起源問題あるいはスキタイ文化の東方からの影響関係を想定する場合に重要な鍵になる問題である。ここではこのタガールの出自問題に触れることはせず、一般的な板石墓であるⅡ式の出自がモンゴル高原西部のプロトⅡ式にあることで、板石墓の出自の問題だけでなく、タガール文化初期のバイノフ期の墓葬の系譜も理解できることになったのである。

モンゴル高原中・東部では、以上のように、方形墓（Ⅰ式）と撥形墓（Ⅲ式）から前800年頃に典型的な板石墓（Ⅱ式）へ変化して行くことが明らかとなった。これは、従来のヘレクスールから板石墓へという単純な見方を再考するものであり、モンゴル高原の墓制の地域差や集団差を明確に示したものである。方形墓・撥形墓と同時期のヘレクスールは、その規模が集団の統合力を示すものであり、必ずしも階層差を反映しているものではないと捉えられている（Wright 2014）が、方形墓・撥形墓は等質的な個人の社会的集団内の位置づけを示している。集団内の個人的格差が、墓葬分布の差異からも典型的な板石墓段階から示される（Honeychurch et al. 2006）ように、典型的な板石墓段階から個人の副葬品の多寡に表現される集団内での階層差が進展している。ブルガン県エギン・ゴル川流域からは板石墓に青銅冑が副葬され（Төрбaт et al. 2003、Erdenebaatar 2004）、ダーラム 4 号墓からは多量の玉と銅泡が副葬されていたように、典型的な板石墓段階から個人の副葬品の多寡に示される集団内での個人の階層差が進展している。前800年頃の墓制上の画期は、モンゴル高原内での社会進化の変化時期でもあったのである。

6. まとめ

これまでモンゴル高原の青銅器時代墓葬は、西部のヘレクスールと東部の板石墓という大きく二つの異なる墓制を持つ社会集団が存在し、相対的には西部のヘレクスールの方が年代的に古い段階に存在し、板石墓の方がより新しい段階に存在することが考えられていた。しかし、板石墓の分類とその変遷を考えていくと、このような年代やその分布上の差異に関しては、新たな歴史的な解釈の変更を迫るものとなった。

それは、板石墓の分類により、異なる三つの墓制が存在することがわかったのである。一つは方形墓であるⅠ式であり、それはモンゴル高原東南部を中心に生まれ、次第にモンゴル東部から中部へと広がっていく。さらに方形墓の長側辺が内湾する形で、モンゴル中部を中心に撥形墓であるⅢ式が生まれていく。Ⅰ式からⅢ式という系譜の中に、モンゴル高原東部からモンゴル高原中部という墓制の広がりや変化が認められるのである。両者は石造の上部構造の下位に土壌を持つものであり東向き頭位を基本とするものの、Ⅰ式が仰臥伸展葬であるのに対し、Ⅲ式が俯せ葬へと変化していく。こうしたモンゴル高原東部から西向き墓葬伝播は、カラスク文化前期における長城地帯からミヌシンスク盆地に向けての青銅器文化の影響関係のベクトル線（松本2009）と一致するものである。

一方でこの段階のモンゴル西部は円形の積石塚を基本とするヘレクスールが対峙している。Ⅰ式の方形墓とⅢ式の撥形墓がモンゴル東部から中部へと伝播のベクトル線を示すのに対し、ヘレクスールはモンゴル高原西部から中部へと広がるベクトル線を示している。この段階は青銅器時代のカラスク文化期に相当し、青銅器文化の文化伝播方向に応じて二つの大きな社会単位が存在し、それぞれに発信源を異にし、さらには文化伝播の方向性を異にしていることが、墓制においても明らかとなったのである。ハニイチャーチはこのⅠ式とⅢ式を合わせてウランズーク・テヴシ文化（Ulaanzuukh-Tevsh Culture）と暫定的に呼び、モンゴル高原東部から中南部に分布する墓制と捉えており（Honeychurch

2015)、筆者の見解に近いものとなっている。そして本稿で呼ぶⅡ式が一般的な板石墓であることを捉えたが、ハニイチャーチもウランズーク・テヴシ文化から板石墓が生まれるとしており、本稿で述べるようなⅠ式→Ⅲ式→Ⅱ式という相対的な概略的变化と同じ見解になっている。

さて、Ⅰ・Ⅲ式はモンゴル高原東部を基点として次第に東部から中部へと広がっていく墓制である。それは前15世紀～前9世紀の間での墓制の展開であった。また、Ⅱ式の大半はモンゴル高原中部から東部において前8世紀～前3世紀における墓制上の変遷を示している。ただし、Ⅱa式の祖形と考えられるプロトⅡ式の成立は、ヒヤウル・ヒャラーチ1号墓の事例（宮本ほか2016）から見れば、ヘレクスールの構造変化の流れの中からモンゴル高原西部において前13～前12世紀には出現していた可能性がある。このプロトⅡ式からモンゴル高原中・西部でⅡ式とした板石墓が展開するのであり、また一方ではミヌシンスク盆地を中心にタガール文化のバイノフ期の墓葬構造が出現した可能性があるのである。そしてまた、モンゴル高原中・東部ではⅠ・Ⅲ式の段階にモンゴル高原西部のヘレクスールと同様に副葬品がほとんど認められないように、社会的な個人の階層差は進展していなかったが、前8世紀以降のⅡ式である板石墓社会では、副葬品の多寡や埋葬の下部構造の格差が広がっていく段階である。この社会的な格差はミヌシンスク地域のタガール文化期の墓制ほどではないが、モンゴル高原中・東部でも同じような社会的な発展が認められる。

今後は、このようなモンゴル高原の中・東部の方形墓・撥形墓から板石墓への展開、さらに地域的な東から西への墓制や文化の広がりとともに、プロトⅡ式に見られるようなモンゴル高原西部のヘレクスールの動向とモンゴル高原中・東部の墓制との関係性を明らかにしていかなければならない。また、前8世紀に出現する一般的な板石墓であるⅡ式の成立の社会的要因を究明しなければならない。これに先立つ前9世紀の寒冷化と社会変化の関係が捉えられる場合（Geel et al. 2004）もあるように、タガール文化成立の社会的背景を探る必要があるのである。さらにこの問題は、この時期にみられる騎馬文化のモ

ンゴル高原への展開（Honeychurach 2015）の問題とも関連している。そして、こうした墓制のモンゴル高原内での地域的な展開の中、如何にして匈奴へと再編され統合されていくかの過程をも明らかにされるべきであろう。

本稿は、平成27年度～平成30年度日本学術振興会科学研究費基盤研究（A）「ユーラシア東部草原地帯における騎馬遊牧社会形成課程の総合的研究」（代表：宮本一夫）の研究成果の一部である。

注

- (1) 以下の板石墓の研究史は、ツヴィクタロフ（Цыбиктаров 1998）による。
- (2) 後にはチルルト期を前8～前3世紀、アツツアイ期を前8～前6世紀とする（Cybiktarov 2003）が、チルルト期の前3世紀は前13世紀の英語表記の誤植であろう。

参考文献

日本語

- 白石典之編2013『イフハイラント・タワンハイオラースト 日本・モンゴル共同発掘調査「新世紀プロジェクト」2012年調査報告』新潟大学・モンゴル科学アカデミー考古学研究所
- 高濱 秀2006『ユーラシア草原地帯東部における騎馬遊牧文化の成立に関する研究 平成15年度～17年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書』
- 松本圭太2009「カラスク式短剣の成立と展開」『古代文化』第61巻第1号、37-55頁
- 宮本一夫2000『中国古代北疆史の考古学的研究』中国書店
- 宮本一夫2007「漢と匈奴の国家形成と周辺地域－農耕社会と遊牧社会の成立－」『九州大学21世紀COEプログラム「東アジアと日本：交流と変容」統括ワークショップ報告書」、111-121頁
- 宮本一夫2014a「北方系帯飾板の出現と展開」『ユーラシアの考古学』35-48頁、六一書房
- 宮本一夫2014b「モンゴル高原テプシ遺跡を掘る－青銅器時代板石墓の発掘調査から－」『シルクロード』Vol.24、2-5頁、九州・シルクロード協会
- 宮本一夫2015a「モンゴル高原の先史時代を探る－青銅器時代板石墓の発掘調査から－」『東アジアの砂漠化進行地域における持続可能な環境保全』（九州大学東アジア環境研究機構RIEAE叢書VI）、99-135頁、花書院。
- 宮本一夫2015b「モンゴル高原ボル・オボ－青銅器時代墓地を掘る」『シルクロード』Vol.25、2-5頁、九州・シルクロード協会

- 宮本一夫・小畑弘己・大坪志子 2011 「モンゴル国ヘンティ県ダーラム板石墓の発掘調査」『第12回北アジア調査研究報告会』47-50頁、北アジア調査研究報告会実行委員会
- 宮本一夫・T.Amgalantugs・B.Tsogtabaatar 2014 「モンゴル国ウブスハンガイ県テヴシ遺跡の発掘調査から見た板石墓の位置付け」『第15回北アジア調査研究会報告会』37-40頁、北アジア調査研究報告会実行委員会
- 宮本一夫・T.Amgalantugs・B.Tsogtabaatar 2015 「モンゴル国バヤンホンゴール県ボル・オボー遺跡の発掘調査からみた青銅器時代墓葬の展開」『第16回北アジア調査研究会報告会』17-20頁、北アジア調査研究報告会実行委員会
- 宮本一夫・田尻義了・松本圭太・T.Amgalantugs・B.Batbold 2016 「モンゴル国ゴビ・アルタイ県ヒヤウル・ヒャラーチ遺跡の発掘調査」『第17回北アジア調査研究会報告会』13-16頁、北アジア調査研究報告会実行委員会
- 吉本道雅 2008 「東胡考」『史林』第91巻第2号、95-115頁

英語

- Allard Francis & Erdenebaatar Diimaajav 2005 Khirigsuurs, ritual and mobility in the Bronze Age of Mongolia. In *Antiquity* 79(305), pp. 547-563.
- Bokovenko Nikolay. A. 2006 The emergence of the Tagar culture. In *Antiquity* 80 (310) pp. 860-879.
- Cybiktarov A. D. 2003 Central Asia in the Bronze and Early Iron Ages (Problems of Ethno-Cultural History of Mongolia and the Southern Trans-Baikal Region in the Middle 2nd – Early 1st Millennia BC). *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 1 (13), pp. 80-96.
- Erdenebaatar 2004 Burial materials related to the history of the Bronze Age in the territory of Mongolia. In Linduff K. M. ed. *Metallurgy in Ancient Eastern Eurasia from the Urals to the Yellow River*, the Edwin Kellen Press, Lewiston.
- Fitzhugh William ed. 2005 *The Deer Stone Project Anthropological Studies in Mongolia 2002-2004*. Arctic Studies Center National Museum of History Smithsonian Institution, Washington D. C., National Museum of Mongolian History, Ulaanbaatar.
- Frohlich Bruno, Amgalantugus Tsend, Littleton Judith, Erden Batshatar, Hunt David, Nittler Elizabeth, Karstens Sarah, Frohlich Thomas, and Galdan Ganbaatar. 2010 An Overview of theories and hypothesis pertaining to Mongolian Bronze age Khirigsuurs in the Hovsgol Aimag, Mongolia. In *АРХЕОЛОГИЙН СҮДЛЭЛ* 1-21, pp. 123-143, Үлаанбаатар.
- Geel B. van, Bokovenko N. A., Burova N. D., Chugunov K. V., Dergachev V. A., Dirksen V. G., Kulkova M., Naglef A., Parzinger H., Plicht J. van der, Vasiliev S. S., Zaitseva G. I. 2004 Climate change and the expansion of the Scythian culture after 850 BC: a hypothesis, *Journal of Archeological Science* 31.pp. 1735-1742.
- Honeychurch William 2015 *Inner Asia and Spatial Politics of Empire Archaeology, Mobility, and Culture Contact*, New York, Springer.
- Honeychurch William, Wright Joshua and Amartuvshin Chuang 2006 Re-writing monumental

landscapes as Inner Asian political process. In Hanks B. E. and Linduff K. ed. *Social Complexity in Prehistoric Eurasia Monuments, Metals, and Mobility*, pp. 330-357, Cambridge, Cambridge University Press, UK.

Kovalev, Alexei A. & Erdenebaatar. Diimazhav 2009 Discovery of New Cultures of the Bronze Age in Mongolia according to the Data obtained by the International Central Asian Archaeological Expedition. In J. Bemmann H. Parzinger, E. Pohl, D. Tseveendorzh ed. *Current Archaeological Research in Mongolia, Papers from the First International Conference on "Archaeological Research in Mongolia" held in Ulaanbaatar, August 19th-23rd, 2007*. pp. 104-117, Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität, Bonn.

Legrand Sophie 2006 The emergence of the Scythians: Bronze Age to Iron Age in South Siberia. In *Antiquity* 80(310), pp. 843-859.

Miyamoto, K. & Obata, H. ed. 2016 *Excavation at the Daram site and the Tevsh site*, Kyushu University, Fukuoka.

Nelson, Albert Russell, Amartuvshin Chuang and Honeychurch William 2009 A Gobi mortuary site through time: bioarchaeology at Baga Mongol, Baga Gazaryn Chuluu. In J. Bemmann H. Parzinger, E. Pohl, D. Tseveendorzh ed. *Current Archaeological Research in Mongolia, Papers from the First International Conference on "Archaeological Research in Mongolia" held in Ulaanbaatar, August 19th-23rd, 2007*. pp. 565-578, Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität, Bonn.

Wright Joshua 2014 Landscapes of Inequality? A Critique of Monumental Hierarchy in the Mongolian Bronze. In *Asian Perspectives*, 51(2), pp. 139-163.

Tumen Dashtseveg, Khatanbaatar Dorjpurev, Erdene Myagmar 2014 Bronze Age Graves in the Delgerkhaan Mountain Area of Eastern Mongolia and the Ulaanzuukh Culture. In *Asian Archaeology*, Vol.2, Science Press, Beijing.

ロシア語・モンゴル語

Амгалантөгс Ц., Батболд, Н. Эрдэнэ Г., Батдалд Б. 2015 *Чандмань Харуулын археологийн дурсгал*. Улаанбаатар.

Амартувшин Ч., Жаргалан Б. 2008 Бага газрын чулуунд хийсэн хүрэл зэвсгийн түрүү үеийн булшны судалгаа *АРХЕОЛОГИЙН СУДЛАЛ* 1-22, pp. 77-91, Улаанбаатар.

Амартувшин Ч., Адармөнх П. 2010 Улаанбоомын хүрэл зэвсгийн үеийн дурсгал. *АРХЕОЛОГИЙН СУДЛАЛ* 1-21, pp. 61-93, Улаанбаатар.

Амартувшин Ч., Ханичёрч. 2010 *Дундговь аймагт хийсэн археологийн судалгаа: Бага газрын чулуу*, Улаанбаатар.

Амгалантөгс Ц., Эрдэнэ Б., Прохлич Б., Хант Д. 2007 Умард монголд явуулсан археологийн судалгаа. *АРХЕОЛОГИЙН СУДЛАЛ* 1-25, pp. 106-130, Улаанбаатар.

Гүнчинсүрэн Б., Гантулга Ж., Базаргүр., Хатанбаатар П., Марколонго Б. Марколонго Ф. 2010

- Орог нуур орчимд хийсэн археологийн малтлага судалгааны урьдчилсан үр дүнгээс.
АРХЕОЛОГИЙН СУДЛАЛ 1-21, pp. 144-169, Улаанбаатар.
- Грязнов М. П., Завитухина М.П., М. Н. Комарова, Миняев С. С., Пшеницына, Хубяков Ю. С.
1980 *Комплекс Археологических Памятников у Горы Тепсей на Енисее*, Наука, Новосибирск.
- Ковалев, А. А.. Эрдэнэбаттар, Д. 2012 *Чемурчекский Купытурный феномен Исследования последних лет*, Санст-Петербург.
- Лазаретов И. П. 2007 Памятники баиновского типа и тагарская культура. *Археологические вести* 14, pp. 93-105, Наука.
- Миямото Казуо 2013 Социальные изменения скотоводческого общества на основе анализа плиточных иогил Монголии. *Современные решения актуальных проблем евразийской археологии*, Издательство Алтайского государственного университета., pp. 130-133, Барнаул.
- Төрбат, Ц., Амаргувшин Ч., Эрдэнэбат, У. 2003 *Эгийн Горын сав нутаг дахь Археологийн дурсгалууд*, Улаанбаатар.
- Түмен, Д., Эрдэнэ М., Хатанбаатар Д., Анхсанаа,Г., Ванчигдаш Ч. 2010 “Дорнод Монгол” төслийн хүрээнд гүйцэтгэсэн археологийн судалгаа (2010). *Mongolian Journal of Anthropology, Archaeology and Ethnology*, 6(1), pp. 167-215, Улаанбаатар.
- Цыбиктаров А. Д. 1998 *КУЛЬТУРА ПЛИТОЧНЫХ МОГИЛ МОНГОЛИИ И ЗАБАЙКАЛЬЯ*, Издательство Бурятского госуниверситета, Улан-Уде.

中国語

- A・A・科瓦列夫、Д・額爾德涅巴德爾 2009 「蒙古青銅時代文化の新発見」『*辺疆考古研究*』第8輯、246-279頁、科学出版社
- 馬健 2015 「内蒙古陰山地区早期石版墓の初歩調査与研究」『*中国北方及蒙古、貝加爾、西伯里亞地区古代文化（上）*』278-286頁、科学出版社

韓國語

- 에르텐바타르. 디마자브. 2012 몽골 초원의 청동기 문화와 석인상 연구. *史学志* 제44집, 54-81, 단국사학회.
- D. 체벤도르지 2009 몽골의 청동기와 초기 철기시대에 대한 연구. 부산박물관 2009년 특별전 사회 몽골, 초원에핀 고대문화, 120-127, 부산박물관, 서울대학교박물관, 몽골 과학아카데미 고고학연구소, 몽골국립박물관.
- 서울대학교 고고미술사학과, 서울대학교 박물관, 몽골 과학아카데미 고고학연구소, 몽골 국립박물관 2008 몽골 에르드네 판석묘 유적